

古典派価値論の比較検討 —スミス、リカード、スラッファ—

福田進治（弘前大学）

1 本報告の課題

古典派経済学の研究では、様々な歴史的または部分的な事実を解明することが重要であるが、同時にその全体像を再構成することも重要な課題である。後者のためには、様々な部分的な要素をある程度単純化しながら比較し、主要な共通点と相違点を整理し、全体像を推定していく方法がときには必要になる。こうした方法を用いて、本報告では古典派経済学の価値理論を検討する。

ところで、比較検討のためには何らかの基準が必要である。従来の古典派経済学の研究では、マルクスまたはスラッファの立場を基準とする研究が多く見られた¹⁾。しかし、これら後世の有力な理論家の立場を基準とする研究は、一定の理論的意義をもつとともに、歴史的事実を歪曲または過度に単純化する恐れをもつ。こうした弊害を避けるために、本報告ではリカードの理論的立場を比較検討のための基準とする。

こうして、本報告の課題は、リカードの労働価値理論の論理を基準として、古典派経済学の価値理論を比較検討することである。具体的には、アダム・スミスの価値理論、リカードの労働価値理論、スラッファの生産理論の論理構成について検討し、これらの間に理論上の系譜関係を再構成する。その上で、全体としての古典派価値論の性格及び意義について再検討する。

リカードの労働価値理論の論理とは、その成立の理論的前提である「均等利潤の成立」と「貨幣商品の定義」の2つの仮定、並びに、その理論的帰結である「投下労働量と価格の比例関係」と「貨幣賃金と利潤率の相反関係」の2つの命題からなるリカードの純粋な労働価値理論の論理構成を指す²⁾。こうした仮定または命題の在否や組み合わせを整理することを通して、リカードの立場とスミスまたはスラッファの立場を比較すること、あるいはリカード自身の立場の変化を検討することができる。

リカードの立場を基準として古典派価値論を比較検討することは、マルクスまたはスラッファの立場を基準とする研究の弊害を避けるだけでなく、古典派経済学の研究の方向性を反転させることを意味する。すなわち、本報告は、古典派経済学自身の立場を基準する古典派経済学の研究の試みであり、さらには、古典派経済学の立場を基準としてマルクスまたはスラッファの経済学を検討する道を開くものである。

2 古典派価値論の論理構成

古典派価値論の系譜を再構成するために、まず、アダム・スミスの価値理論、リカードの労働価値理論、スラッファの生産理論の論理構成を、以下のように5つの議論に区別して類型化する。

2-1 スミスの未開社会の価値理論

周知のとおり、スミスは「初期未開の社会」では、商品と商品は両者の生産のために投下された労働量の比率に依存して交換されると述べた³⁾。

最も基本的な仮定は「商品の交換」の存在であり、この交換を規制する唯一の原理として、スミスはその商品の生産のために投下された労働量を挙げている。これは古典派価値論の基本的原理の表明であり、スミスのいう未開社会における投下労働量と価値の比例関係の成立を意味する。従って、この議論は古典派価値論の系譜において最も単純なケースとして位置づけることができる。

2-2 スミスの文明社会の価値理論

しかし、スミスは「進歩した社会」では、資財の蓄積と土地の占有の進行によって利潤と地代が発生するため、商品の交換は投下労働量のみには依存するのではないと述べて、投下労働量と価値の比例関係の成立を否定した⁴⁾。

ここで、スミスは部門間の資本の移動を通して部門間で均等な利潤率が成立することに言及したが、この問題と価値の決定の問題の関係については検討しなかった。従って、スミスの価値理論には均等利潤の成立の仮定は、事実上存在しなかった、少なくともリカードの議論の場合と同様の役割を果たしていなかったと見なすことができる⁵⁾。スミスは利潤（と地代）の発生を原因として、投下労働量と価値の比例関係は成立しなくなると考えたため、貨幣賃金と利潤率の相反関係を確定することができず、その結果、リカードと同様の労働価値理論の立場を確立できなかった。

2-3 リカードの純粋な労働価値理論

リカードは収穫逡減下の経済成長に伴う一般的利潤率の低下の過程を説明するために、スミスの文明社会の価値理論を批判し、再度、投下労働量と価格の比例関係の成立を主張し、同時に貨幣賃金と利潤率の相反関係の成立を主張した⁶⁾。

このために、リカードは部門間の資本の移動を通して、部門間で均等な利潤率が成立することを仮定することによって、投入費用と価格の比例関係の成立を確定した。同時に不変の価値尺度として、労働生産性が不変である貨幣商品が採用されると仮定することによって、価格の絶対水準の不変性を確定した。これら2つの仮定を採用することによって、リカードは投下労働量と価格の比例関係、並びに、貨幣賃金と利潤率の相反関係の成立を主張した。そして、これら2つの命題に基づいて、穀物価格の上昇、貨幣賃金の上昇、利潤率の低下の過程の分析を行った⁷⁾。

2-4 リカードの修正された労働価値理論

リカードは諸商品の生産過程の間に資本構成の相違が存在するとき、貨幣賃金の変化が利潤率の変化とともに商品の価格の変化をもたらすために、上記2つの命題が厳密には成立しないことに気付いた（修正問題）。そしてリカードは当初の労働価値理論の立場を擁護するために、価格の変化を最小化する戦略的な工夫を編み出した⁸⁾。

しかし、特別な工夫を用いなくても、リカードの労働価値理論は資本構成の相違の仮定の下で、その本質的な論理と主張を保持しながら、修正された形で成立する。この場合、投下労働量と価格の厳密な比例関係は成立しないが、増加関数の関係は成立し、また貨幣賃金と利潤率の相反関係は以前と同様に成立する。そして、これらの一部修正された命題を用いて、一般的利潤率の低下の過程は厳密に論証することができるから、リカードの労働価値理論の成立は修正問題の発生によって否定されることはない⁹⁾。

2-5 スラッファの生産理論

スラッファはリカードの立場とスラッファ自身の立場の間に類似性が存在することを示唆しながら、リカードの経済学の再評価を試みたが、スラッファのいう類似性はスラッファ自身の議論の基礎である循環型の物量体系の論理であり、リカードの労働価値理論の固有の論理には言及していない。

しかし、スラッファの生産理論では一貫して均等利潤の成立（と資本構成の相違）が仮定されているから、少なくともこの一点について、スラッファの議論はリカードの労働価値理論と類似の論理をもつと言わねばならない。すなわち、スラッファの議論は事実上、循環型の再生産過程の仮定を導入することによって、リカードの修正された労働価値理論の議論を発展させたものであり¹⁰⁾、古典派価値論の系譜において最も発展したケースとして位置づけることができる。

3 古典派価値論の系譜

以上のように類型化された5つの議論は、古典派価値論の系譜として整理して提示することができる。以下では、この系譜について検討する。

3-1 古典派価値論の系譜

リカードの純粋な労働価値理論の論理構成を基準として比較したとき、スミスの文明社会の価値理論は均等利潤の成立の仮定が欠如した議論、さらに未開社会の価値理論は利潤の存在自体が想定されていない議論、また、リカードの修正された労働価値理論は資本構成の相違の仮定が追加された議論、スラッファの価格理論は循環型の再生産過程の仮定が追加された議論として把握することができる。また、リカードの貨幣商品の定義の仮定はリカード自身の修正された労働価値理論には同様に含まれるが、スミスおよびスラッファ

の議論には含まれていない。

結局のところ、古典派価値論の系譜は、スミスの未開社会の議論を出発点として、利潤

【古典派価値論の系譜：仮定と類型】

	追加的仮定	類 型
1	商品の交換	スミス 未開社会の価値理論
2	利潤の発生	スミス 文明社会の価値理論
3	均等利潤の成立	リカード 純粋な労働価値理論
4	資本構成の相違	リカード 修正された労働価値理論
5	循環型の再生産過程	スラッファ 剰余のある生産の理論

の発生、均等利潤の成立、資本構成の相違、循環型の再生産過程という 4 つの仮定を順次追加していく過程として把握することができる（上図参照）。

3-2 古典派価値論の前提

リカードの労働価値理論の理論的前提は「均等利潤の成立」と「貨幣商品の定義」の 2 つの仮定であるが、このうち前者は古典派価値論の系譜を特徴づける仮定であり、後者はリカードの議論における固有の仮定である。

スミスは均等利潤の成立の仮定と価値の決定の問題の関係を解明できなかったために、整合的な価値理論を提示することができなかったが、リカードはこの仮定を明確に価値の決定と関連づけることによって、古典派価値論の新しい段階を開いた。さらに、リカードが均等利潤の成立と自然価格の成立を同一視しているように、この仮定は古典派経済学の自然概念の定義に含まれる本質的要素でもある¹¹⁾。

スミスは価値尺度について検討したが、リカードのように価値尺度を用いて絶対価格を確定することはできなかった。スラッファは経済全体の純生産物の大きさを一定不変とする仮定を用いて、リカードの労働価値理論とは異なる議論を展開した。従って、リカードの労働価値理論とスミスまたはスラッファの立場の最大の相違は、貨幣商品の定義の仮定にあるといえる。

3-3 古典派価値論の帰結

リカードの労働価値理論の理論的帰結は「投下労働量と価格の比例関係」と「貨幣賃金と利潤率の相反関係」の 2 つの命題であるが、従来、労働価値理論の命題とは、前者の命題の厳密な成立を意味すると見なされがちだった。しかし、この命題は古典派価値論の系譜を見たとき、その全体を特徴づけるとは言い難い。

投下労働量と価格の比例関係の命題は、スミスの未開社会の価値理論、リカードの純粋な労働価値理論において成立し、スミスの文明社会の価値理論、リカードの修正された労働価値理論、スラッファの生産理論において成立しないが、このうち前 2 者のケース（およびマルクスの価値体系のケース）のみが労働価値理論であるという見方は、狭い見方であり、恣意的であるように思われる。むしろ、労働価値理論を投下労働量と価格の比例関係が厳密または近似的に成立し、かつ貨幣賃金と利潤率の相反関係が厳密に成立する体系として広く捉えることによって、古典派価値論の系譜における労働価値理論の理論的および歴史的意義を正しく評価できると考えられる。

3-4 リカードとスラッファ

先述のとおり、スラッファの生産理論は、リカードの修正された労働価値理論の議論を発展させたものであると見なすことができる。このように、リカードの労働価値理論の論理を基準として、スラッファによる古典派経済学の再評価の試みを肯定的に評価することは、無理のない主張である。

スラッファの循環型の物量体系の論理は、古典派経済学の議論の中に自覚的に含まれていたと見なすことは難しいが、古典派経済学の論理と本質的に相反するものではなく、古典派経済学における多部門的な見方の拡張として説明できることができる。

また、スラッファの生産理論は古典派経済学の主要な課題である経済成長の分析を目的とするものではないが、特に、リカードの修正された労働価値理論の議論における価値と分配の分析の発展した形態に相当するものと見なすことができる¹²⁾。

4 結 語

本報告における研究は、その対象についても方法についても極めて限定されたものであることは言うまでもないが、それでもいくつかの重要な示唆が得られた。

上記の検討より、古典派価値論の系譜の本質は、リカードの立場を典型とする広義の労働価値理論の諸形態であるということができる。この理論は均等利潤の成立の仮定によって特徴づけられ、自然価格の決定の原理を説明する。換言するなら、生産要素の移動が停止した状態における長期均衡価格の決定理論の先駆的貢献である。ただし、その長期均衡価格の絶対水準の決定を合理的に説明したのは、貨幣商品の定義の仮定を採用したリカードだけだった。

また、マルクスはマルクス自身の価値体系の完成に至る古典派価値論の系譜を提示したが、リカードの立場を基準としたとき、むしろスラッファの生産理論に至る系譜

を再構成することができる。ところが、スラッファはスラッファ自身の循環型の物量体系の論理を古典派価値論の系譜に当てはめようとしたが、むしろ古典派価値論の系譜における労働価値理論の最も発展したケースがスラッファの生産理論であるというべきである。

5 補 遺 –マルクスの価値体系–

本報告では、マルクスによる古典派価値論の解釈を再考することを提起したが、マルクス自身の理論的立場には言及しなかったので、若干補っておきたい。

リカードの労働価値理論が均等利潤の成立を前提として成立するのに対して、マルクスの価値体系は均等利潤の成立によって価格体系に変形する。一方で、リカードの純粋な労働価値理論は資本構成の相違の仮定の導入によって成立しなくなるが、マルクスの価値体系には資本構成の相違の仮定は当初から含まれている。従って、マルクスの価値体系は、リカードの立場とは対照的な論理構成をもつのであり、リカードの立場を基準として見たとき、均等利潤の成立の仮定が欠如し、かつ資本構成の相違の仮定が追加された議論として把握することができる。こうしたマルクスの議論は、古典派価値論の系譜の中でも独特の位置を占めるだろう。

1) マルクス『剰余価値学説史』、スラッファ編『リカード全集』（編者序文）に依拠する研究を指す。

2) 福田 2000「リカードの労働価値理論の論理構成」『年報』38, pp.123-133 を参照。

3) Smith,A. 1950, The Wealth of Nations, Methuen, vol.1, p.49.

4) Smith,A. 1950, p.51.

5) Smith,A. 1950, pp.50-51 では、資本構成の相違に言及されているが、同時に、投下労働量と価値の比例関係が利潤の発生を原因として成立しなくなる旨が述べられている。福田 2001「スミスとリカードの価値理論の比較検討」『弘前大学経済研究』24, pp.23-25 を参照。

6) Ricardo,D. 1951, The Principles of Economics, Works, vol.1, Cambridge UP, pp.22-23n, p.46, 福田 2001, pp.28-30 を参照。

7) 福田 2000 によると、部門間で利潤率および貨幣賃金が各々均等であるとき、任意の商品の労働量あたり生産額と貨幣商品の労働量あたり生産量は等しくなり、さらに貨幣商品の労働生産性が一定不変であるとき、任意の商品の絶対価格は確定する。

8) Ricardo,D. 1951, p.36, pp.45-46 では、貨幣賃金の変化の影響は「軽微」とであるとされ、さらにその影響は平均的な資本構成をもつ貨幣商品を採用することによって最小化されると述べられている。福田 2002「リカードの労働価値理論と修正問題」『弘前大学経済研究』25, pp.56-57。

- 9) 福田 2002, pp.59-60 を参照。
- 10) 福田 2004「リカードとスラッファの経済理論」『弘前大学経済研究』27, pp.44-46 を参照。
- 11) Ricardo,D. 1951, pp.88-89.
- 12) リカードの主要な分析が「価値と分配の分析」と「分配と成長の分析」に分かれていることに留意せねばならない。福田 2004, pp.42-44 を参照。